



ミハエル女学院

隷奴の祝祭

北都凜

挿絵／猫丸

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION

第一章	淫獄のはじまり	4
第二章	向けられた憎悪	50
第三章	牝犬と呼ばれて	101
第四章	秘められた姦計	155
第五章	隷奴たちの祝祭	201
第六章	堕ちた天使たち	252

登場人物

Characters

宮越 亜弥

(みやこし あや)

ミハエル女学院三年。ストレートの黒髪に、張りのある大きな胸を持つ、滲刺とした性格の十七歳。裕福ではないため、理事長の薦めで奨学金制度を利用している。

天峰 涼香

(あまみね すずか)

ミハエル女学院高等学校三年。十八歳。長い栗色の髪、スレンダーなモデル体型。学院理事長の孫でわがままな気分屋。亜弥にライバル心を剥きだしにしている。

藪嶋 三平

(やぶしま さんぺい)

ミハエル女学院の用務員。下卑た小汚い男。以前は天峰家の小間使いをしていた。

天峰 熊三

(あまみね くまぞう)

ミハエル女学院の理事長で、涼香の祖父。亜弥の祖父と懇意にしていた関係で、彼女を奨学生として女学院に転入させた。

（わざわざ旧校舎を指定するなんて……）

よほど人に聞かれたくない話なのだろうか。

第一音楽室は旧校舎にあり、今は使用されていない。亜弥は編入組なので旧校舎で授業を受けたことはないが、去年までは使っていたと聞いている。それにしても、夕日に染まった旧校舎は廃屋のようで薄気味悪かった。

躊躇しながらも建物内に足を踏み入れる。廊下は埃が堆積して白っぽい。考えた末に、革靴のまま最上階に向かう。涼香に教えられたとおりに薄暗い階段を昇り、廊下を歩いていくと第一音楽室が見えてきた。

恐るおそるドアを開けてなかに入る。窓から夕日が射しこんでおり、すべての物がオレンジ色に染まっていた。暗闇が訪れる寸前の、眩しいほどの明るさだ。

「あれ……なんだろう？」

一人でいる心細さからだろうか。思わず声に出してつぶやいてしまう。

亜弥の視線は、教室の中央に置かれている物に吸い寄せられていた。机も椅子もなのだが、なぜかそこには体育の授業で使用する白いマットが敷かれている。埃を被っていないので、最近持ちこまれた物らしい。

不思議に思いながらも、涼香が来るのを所在なく待ちつづける。不安になってきた

とき、ようやく廊下に人の気配を感じて振り返った。

「え……？」

第一音楽室の入り口に立っていたのは、涼香ではなく用務員の藪嶋三平だ。亜弥はすっかりして、鼠色の作業服を着た藪嶋を見つめた。

五十がらみの小男で、頭髮は全域に渡って薄くなっている。残されている毛は脂ぎっており、頭皮にべったりと張りついていていた。控えめなミハエルの令嬢たちも思わず眉を顰めるような、見るからに不潔そうな男だった。

藪嶋はなにやら下卑た笑みを浮かべながら教室に入り、後ろ手にドアを閉める。亜弥は無意識のうちにじりじりとあとずさりしていた。

「あの、涼香さん……天峰さんは？」

思いきって尋ねてみると、藪嶋は手にしていた黒いポストンバッグを床に置き、調子よさそうに何度も頷いてみせる。その仕草がどうにも信用ならなかった。

「ああ、はいはい。お嬢さまは、あとからおいでになると思いますよ」

この男は以前、天峰家の使用人だったという噂だ。だから今でも涼香のことを、お嬢さまと呼んでいるらしい。

理事長はなぜこの下劣な男を用務員にしたのだろう。亜弥だけではなく全校生徒が、

ミハエルには相応しくないと内心疑問に思っていた。

「では、お嬢さまが到着する前に……」

藪嶋の目が妖しい光を放つ。つかつかと歩み寄ってきたかと思うと、いきなり手首を掴んできた。

「なっ、なんですか？」

慌てて振り払おうとするが、用務員の握力は凄まじい。日頃の雑用の賜物か、小男とは思えない腕力だ。抵抗する間もなく、垂弥はマットの上に投げだされた。

「きゃっ！」

訳がわからないままうつ伏せに押さえつけられ、両腕を背後に捻りあげられる。肩に痛みが走り、頬をマットにつけて「ううつ」と小さく呻いていた。

「あまり暴れないでくださいよ。この白い肌に傷をつけたくないでしょう」

背後から藪嶋の声が聞こえてくる。そして手首に細い紐状の物が巻きつけられていく。どうやら、あらかじめビニール紐を用意していたらしい。手首を交差させて、しっかりと縛りつけられてしまった。

背中を押さえつける力がゆるんだ隙に仰向けになる。藪嶋は足もとに仁王立ちして、粘りつくような視線を向けていた。

「用務員さんっ！ ちょっと、なにを？」

なにが起こっているのか理解できない。涼香を待っていると、なぜか藪嶋が現われたのだ。

「ちなみに、ここは音楽室なんで防音はしっかりしてるんですよ。どんなに大声をあげても誰にも聞こえませんよ」

用務員の口もとがニヤリと歪む。とにかく、理不尽な暴力に巻きこまれたことだけは確かだった。

「くっ……ほどうて！」

腕に力をこめると、ビニール紐が手首に食いこんだ。皮膚が裂けそうな痛みが走るだけで、いっこうにほどける様子はない。じわじわと恐怖が湧きあがり、心が凍りついたように寒気を憶えた。

そんな亜弥を見おろしながら、藪嶋が作業服を脱ぎはじめ。薄汚れたTシャツの下からは、意外なほど筋肉質な上半身が露わになった。さらにズボンとトランクスをおろし、すでにいきり勃っている陰茎を剥きだしにするではないか。

「やだっ、な、なにをしてるんですか？」

初めて目にする男性器は、あまりにも巨大で醜悪だった。腐った肉のようにどす黒

く、太い血管がまるでミミズのように浮きでている。処女の亜弥は一瞬で気圧されて、双眸を見開いたまま唇をわななかせた。

（怖い、あんなに大きいなんて……気持ち悪いわ）

グロテスクな肉の棒は、戦意を喪失させるほどの迫力に満ちている。亜弥は悪夢を振り払うように顔を背けて、できるかぎり強く両目を閉じた。

「その反応からすると、まだ男を知らないのかなあ？」

藪嶋はさも嬉しそうにつぶやき、仰向けになっている亜弥に馬乗りになった。

「やめてっ、なにするんですか！」

慌てて身を振るが、両手を縛られてはどうにもならない。足をバタつかせたとこで、マットを叩く鈍い音が響くだけだ。

藪嶋の手がセーラーブレザーにかかり、なかに着ていたシャツと一緒に捲りあげられる。すると引き締まった腰まわりの肌が覗いてしまう。

「きゃっ、ちよつと、いやっ」

飾り気のない純白のブラジャーも丸見えになり、瞬時に頬が染まっていく。もちろん下着姿を男性に見られるのは初めてだ。十七歳のヴァージンにとっては、それだけでも気絶しそうな羞恥だった。

しかし、藪嶋は手を休めることなく、ブラジャーを押しあげにかかる。乳房の裾野を撫でるようにしながら、薄布をゆつくりとずらしていく。

「さあて、邪魔な物は取ってしましましょうね」

「ま、待ってください、それはダメっ、やっ、いやあっ！」

胸もとが軽くなったかと思うと、双つの大きな膨らみがプルルンツと勢いよくまろび出た。新鮮な果実のように瑞々しい乳房だ。なだらかな曲線を描く丘陵の頂点では、鮮やかなピンク色の乳首が恥ずかしげに鎮座していた。

薄汚い用務員の視線に晒されるのは、死にも勝る恥辱だった。嫌悪感も加わりショックはさらに大きくなる。

「こいつはいい。美味しそうなオッパイだあ」

藪嶋は涎を滴らせながらつぶやき、いきなり乳房にむしゃぶりついてきた。双つの膨らみを下から掬いあげるようにして、乳首を激しく吸いたててくる。

「ひいつ、いやっ、どういふことですか、ひいつ、やめてえっ！」

たまらず大声で叫ぶが、左右の乳首を交互に舐めしゃぶられてしまう。生温かい舌が這いまわり、おぞましさとくすぐったさが突き抜ける。芋虫のような指が柔肉に食いこみ、双丘の芯に鈍痛と汚辱感が^{おり}澱のように沈殿していく。

乳頭は瞬く間に唾液にまみれ、窓から射しこむ夕日を受けてヌラヌラと妖しい光を放ちだしていた。

「ウヘヘッ、美味いつ、美味いぞおっ」

「ひっ……ひっ……こんなこと……ひいつ」

まともな言葉も発することができず、後ろ手に拘束された身体を振りたてる。しかし、暴れれば暴れるほど、ビニール紐が手首に食いこむだけだった。

しつこく舐められているうちに、乳首がぷつくりと充血して膨らみはじめる。先端が硬く尖り勃起、ピンク色がほんの少し濃くなった。

「おほっ、 बीचクが勃起してきましたね。感じてるんですか？」

藪嶋はナメクジのような舌を伸ばして、乳輪をねつとりとなぞりまわす。そして感度を増した乳首を、弾くように舐めあげた。

「ひゃっ……い、いやっ、やめて……ううっ、気持ち悪い」

亜弥は汚辱感に眉根を寄せながら、眼光鋭く男の顔をにらみつける。こんなことで泣き寝入りする性格ではない。日頃から女性痴漢などの理不尽な暴力に屈することなく、徹底的に対抗するべきだと考えていた。

（こんなこと許さない。私、どんなことされても絶対に負けないから！）

怖くないと言えは嘘になる。こうしている今も、貞操の危機をひしひしと感じている。それでも自分を奮いたたせて、卑劣な男と闘う覚悟だ。

「おっ、勝ち気そうない目をしますね。ますます燃えてきましたよお」

藪嶋は散々乳房を揉みしだいて乳首を味わうと、今度は制服のスカートの手を伸ばしてくる。添い寝をするような格好で裾を摘み、無造作に捲りあげるのだ。白くて柔らかそうな太腿が覗き、つづいて純白のパンティが露わになった。

「やだ、見ないで、今ならまだ誰にも言わないから、ああっ、そこはダメっ」
「恥ずかしいんですか？ フフフッ、もっと頑張って抵抗してください」

余裕たつぷりにからかわれて、亜弥は耳まで真っ赤に染めあげた。

白い木綿の布地が張りついた恥丘はこんもりと盛りあがり、うっすらと縦割れの筋を浮きあがらせている。先ほど足をバタつかせたことで、パンティがみっちり食いこんでいた。

「ガキみたいなパンティですわね。こんなの脱いでしましましょう」

「あつ、やつ、どうしたら許してくれるの？ いや、脱がさないでっ」

亜弥の声は無視されて、瞬く間にパンティをつま先から抜き取られる。もつさりと繁った漆黒の陰毛が剥きだしになり、顔が燃えあがったように熱くなった。

「マン毛がモジャモジャだ。濃くていやらしいじゃないですか。いやあ、やつぱり近くで見るといい身体してますねえ」

藪嶋の下卑た笑い声が、激烈な羞恥に拍車をかける。

「そんな、い、いや、本当に怒ります……ああ、やだ、見ないで」

亜弥は双眸を潤ませて、いやいやと首を左右に振りたくった。懸命に内腿を擦り合わせるが、陰毛を隠すことはできない。それどころか、そうやって恥じらう姿がますます男の興奮を煽ってしまう。

（このままだと、私……）

頭の片隅によぎりながらも考えないようにしていたことが、現実のものになろうとしている。それだけは、どんなことがあっても受け入れられない。最悪の事態が目前に迫り、急速に恐怖が膨れあがった。

「ヒヒヒッ、お待たせしました。さっそくいただきますよ」

「駄目っ、絶対……やっ、ああっ、やめてえっ」

藪嶋が覆い被さってきたかと思うと、膝を無理やりこじ開けられる。必死に力をこめるが無駄な足掻きだ。あっという間に下肢を割られ、ぱっくりと股間を開帳させられてしまった。

「やだ、こんな格好……あうっ、やつ……あ、当たってる」

男性器の先端が割れ目に触れている。恐ろしさのあまり顔面蒼白になり、懇願するような瞳で男を見あげていた。

「おや、さっきまでの威勢はどうしたんですかあ？」

藪嶋は好色そうに舌なめずりする。そして、亀頭の先端で陰唇を圧迫した。

「ひっ……ま、待って、挿れないでっ」

「なんてね。驚きましたか？　せっかくの初物です。そんな簡単に破りませんよ」

そんなことを言いながら、またしても腰をググッと押し進めてくる。肉の凶器が陰唇を押し開き、今にも侵入しそうになっていた。

「ううっ、許して……あううっ、しないで、お願いです」

恐怖に心が竦みあがる。亜弥は涙の溜まった瞳で懸命に訴えた。

「処女はこの瞬間がたまらないんですよ。じゃあ、いただきます」

「ひいッ！　ダメっ、挿れないでえっ」

未開の地に剛根がねじこまれて、膣道が強引にひろげられていく。灼けるように熱い肉の塊を感じ、反射的に全身の筋肉が硬直した。直後に行きどまりに到達し、さらに力が加えられる。

「きひいッ、痛いッ、ひッ、ひいッ！」

肉が裂けるようなメリメリッという音が下腹部で響き、凄まじい激痛が全身を貫いた。大きく開かされている両足が宙に浮き、ピンッと伸びたつま先が宙を搔く。背後で縛られている両手は、きつく拳を握り締めていた。

「おううつ、破れましたね。レディになった感想はいかがですか？」

藪嶋の囁きに答える余裕などあるはずがない。処女膜を破られた痛みと、肉塊を埋めこまれた強烈な圧迫感に苛まれているのだ。亜弥は顔を背けて、「ハッ、ハッ」と短く息を吐きだしていた。

無理やりひろげられている大陰唇がジンジンと痺れている。灼けた鉄棒を突きこまれたような異物感が、下腹を小刻みに痙攣させていた。

（私、処女じゃなくなっちゃった……用務員さんに犯されちゃったんだ……）

破瓜の傷みを噛み締めることで、悲しみがこみあげてくる。レイプという最悪の形で、女の子の一番大切なものを失ってしまったのだ。口惜しさとともに目尻に涙の粒が盛り上がり、ついに決壊して流れ落ちた。

「あったかくて気持ちいいですよ。動いていいですか？」

質問しておきながら、藪嶋は答えを待たずに動きだす。処女の強烈な締めつけに我

を忘れて、いきなり強烈なピストンを開始した。

「ひっ、痛いっ、ひいっ、動かないでっ」

たまらず声が裏返った。敏感な膣粘膜を、ヤスリで擦られているような激痛が突き抜ける。マツトの上で背筋が反り返り、眉間に深い縦皺が刻まれた。悲鳴にも似た呻き声が溢れだし、こらえきれない涙が頬を濡らしていく。

「やっ、ひうっ……ううっ、痛い、ひむむっ」

「おおっ、この締めまり、すぐ気持ちいいです。たまりませんっ」

藪嶋は荒い息を撒き散らしながら、腰を力強く振りたくる。亜弥が苦しめば苦しむほど興奮を昂ぶらせて、さらに激しく剛根を抜き差しするのだ。

「編入してきたときから、ずっと目をつけてたんです」

「ひっ……ひっ……や……ううっ」

「犯りたかったんです。ううっ、ずっと犯りたかったんですよっ」

抑えていた感情を爆発させたように、藪嶋がピストンを加速させていく。欲望にまかせた自分勝手な抽送だ。女が苦しんでいることなどまったく気にも留めない、射精することだけが目的のレイプだった。

「処女マンが締まる締まるっ、おほおっ、処女マン最高おっ」

「ひううつ、痛い、あうつ、痛いのも」

亜弥は強烈な摩擦感に耐えきれず訴えるが、もちろん途中でやめてもらえるはずもない。膣道は火傷したように熱くなり、涙がとめどなく溢れていた。

「ううつ、来ました……おううつ、来ましたよ」

藪嶋のうなり声が大きくなる。剥きだしの乳房を両手で握り締めて、腰をさらに激しく打ちつけてきた。

「なかに出しますよ。ううつ、出る出るうつ！」

膣粘膜を擦られるスピードがあがり、熱さをともなう激痛が暴走する。打ちこまれる男根がさらに膨張して、なかでビクビクと脈打ちはじめた。

「だ、ダメっ、それだけは、ひいッ、なかはいやつ、いひやあああああッ！」

剛根が根元まで埋めこまれたかと思うと、凄まじい勢いで灼熱の粘液が注ぎこまれる。瞬く間にネバつく精液で膣道が満たされ、強烈な汚辱感に襲われた。

「ひいっ……ひいっ……」

亜弥は声にならない悲鳴をあげて涙を流す。乱れた制服を纏いつかせた女体が、陸に打ちあげられた若鮎のようにのた打ちまわった。

「おううつ、気持ちいい……最高でしたよお」



思わず啜り泣きが漏れて、歩みが遅くなる。すると、すかさずピシヤリと尻たぶを叩かれた。

「ひやつ……」

「休めとは言ってませんよ。ほうれ、しっかり歩いてください」

まるで家畜のような扱いだ。ついでに打ち据えられた涼香が、怒りの籠もった瞳で振り返った。

「痛いじゃないっ。なにをするのよ！」

まったく怯む様子もなく、鋭い視線でにらみつける。這いつくばっているのに、理事長の孫娘としての威厳は保たれたままだった。

「ぬううつ、躰が足りないようですね」

一瞬気圧された藪嶋が、顔を真っ赤にして鼻の穴を大きく膨らませる。そして右手を振りあげると、青い塗料で染まった令嬢のヒップを叩きはじめた。

「これでどうだっ、この牝犬が、この牝犬があっ！」

「くっ……やめなさいっ、ひうつ……許さないわよっ」

涼香の声を無視して、手のひらが連続して打ちつけられる。これまでの鬱憤を晴らすような、激しい打擲の嵐だ。

「牝犬の分際で、このっ、このおっ！」

「くうっ……ううっ……ひぐっ」

藪嶋はむきになり、何度も何度も尻を叩く。涼香は痛みに顔を歪めるが、唇を噛み締めて耐えている。

（やだ……怖い……）

隣に這っている亜弥は、肩を竦めながら見つめていた。

青い塗料が剥げた臀部は、赤く腫れあがっている。それでも涼香は微かな呻きを漏らすだけで、決して泣き叫んだりはしない。理不尽な暴力に晒されているというのに、なぜか涼香の額に浮かぶ玉の汗も美しく感じられた。

以前亜弥にそうしたように、自身がヒップを叩かれている。涼香が感じている屈辱はかなりのものだろう。それでも彼女は弱音を吐こうとしなかった。

校舎から出て部室棟に移動したことで、人目につく確率はさがっていた。多くは望まない。とにかく一刻も早く終わってほしかった。

「生意気な女め。こいつを喰えろ」

シャワー室に到着した途端、藪嶋が乱暴な口調で命じてきた。

作業服を脱ぎ捨てて全裸になり、亜弥と涼香の鼻先に股間を突きだしてくる。平手打ちの雨を降らせたにもかかわらず、かつての主を屈服させられなかったことを根に持っているようだ。怒りのためなのか、男根はすでにいきり勃っていた。

「ほら、その綺麗なお口でおしゃぶりするんですよ」

ボディペイント用の塗料にまみれた女子校生の前で、目を血走らせた用務員が男根を揺らす。どうやらシャワーは後まわしらしい。トランクスのなかで蒸れていた陰茎は、思わず眉を顰めるような臭いを漂わせていた。

「不潔だわ。誰がそんなことっ」

涼香の放った言葉がきつかけとなり、藪嶋の目の色が変わる。栗色の髪を驚掴みにすると、男根の先端をピンク色の唇に押しつけた。

「ううっ、やめなさ——うむうううっ！」

強引にペニスをねじこまれ、悲痛な呻き声がシャワー室に響き渡る。

亜弥はそこのおぞましい光景をアップで目の当たりにして、思わずひきつった顔をいやいやと左右に振りたくった。

（やだ……男の人の……お口に入れるなんて……）

奥手の亜弥が、男性器を口で愛撫する方法など知るはずもない。それは、あまりに

も衝撃的なものだった。

「ウヘヘッ、お嬢さまにフェラチオさせたんだ。あの生意気なお嬢さまにっ」

藪嶋が興奮した様子で雄叫びをあげる。涼香は眉間に縦皺を刻んで、強く瞳を閉じていた。魅惑的な唇を大きく開かれ、どす黒い太幹を咥えこんでいるのだ。

「んっ……うっ……ううっ」

藪嶋は髪の毛を掴んだまま、ゆっくりと腰を振り始める。涼香が噎せそうになるのを無視して、剛直を根元まで押しこんでいく。

「歯を立てないでくださいよ。そんなことしたら、歯を全部折って、もう一度しゃぶらせますからねえ」

恐ろしいことをつぶやきながら、さらに腰の動きを速くする。剛根は唾液で濡れ光り、涼香の苦しげな呻きが大きくなった。すると藪嶋は嗜虐的な笑みを浮かべて、ますますピストンを激しくする。

「うぐっ……むぐっ、苦し……おぐううっ」

「ちゃんと咥えてくださいね。ほれ、亜弥も手伝うんです。玉袋を舐めるんですよ」
「きやつ……」

いきなり黒髪を掴まれて、力まかせに引き寄せられる。男根を咥えこまされている

涼香と頬が触れ合い、なんともいえない気持ち湧きあがった。

（同情？ ううん……そんなはず、だって私は……）

涼香の命令により、藪嶋に大切な処女を奪われたのだ。彼女のことを恨みこそすれ同情などするはずがない。だが理不尽な暴力に曝されているつらさは、手に取るようにわかった。

「舌を伸ばしてペロペロするんです。さあ」

藪嶋にうながされて、嫌々ながらピンク色の舌先を覗かせる。あの肉塊を舐めるのかと思うと死にたくなるが、父親の会社を守るためには従うしかなかった。

「ううっ……やっ……」

がに股で立っている用務員の股間に潜りこむようにして、伸ばした舌先を皺袋に触れさせる。途端に苦味がひろがり、反射的に顔を離していた。

「いけませんねえ。しっかりしゃぶってくださいないと」

藪嶋はすかさず髪を掴むと、垂弥の唇を陰囊に押しつける。どうやら腕力に頼っても、しゃぶらせるつもりようだ。

「やうっ……うむむっ、く、臭い……」

「そう言いますが、フェラチオを覚えると、この臭いが大好きになるんですよ」

これほど強烈な悪臭を好きになるなど考えられない。少し嗅ぐだけで吐き気がこみあげてくる。しかし、こうしている今も涼香は肉竿を咥えこまされていた。

「さあ、亜弥もつづけてください。タマタマを口に含んでもらいましょうか」

口調は丁寧だが、有無を言わせない響きがある。亜弥は汚辱の涙を流しながら、皺袋に唇を被せていった。

「はふうっ、ンぐっ……き、気持ち悪い……ンンっ」

薄い皮のなかに、小さな球が入っているのがわかる。それはまぎれもなく睾丸だった。全身に鳥肌がひろがるが、吐きだすわけにはいかない。どんなに理不尽な仕打ちであろうと、藪嶋に逆らうわけにはいかないのだ。

「お二人とも咥えてるだけじゃダメですよ。舌を使って気持ちよくするんです」
頭上から降り注ぐ声に従い、口内の皺袋に舌先をそつと触れさせた。

（ああ、いや……生ゴミみたい……）

ツンとする悪臭が鼻を突く。ざらつく感触が気色悪いが、そのままゆつくりと這いまわらせる。嘔吐感をこらえながら皺の間に唾液を塗りこむようにして、そろそろと舐めあげていった。

「おっ……亜弥の舌、なかなか気持ちいいですよ。おほほおっ、お嬢さまも上手いじ

やないですか。カリの裏側も舐めてください」

藪嶋は心地よさそうな声を漏らし、ときおり腰を震わせる。女子校生二人による口唇奉仕は、多大なる快感を与えているらしい。

「ダブルフェラは最高ですよ。それじゃあ、ちよつと交代してもらえますか。今度は亜弥が竿を咥えて、お嬢さまが袋を担当してください。ヒヒヒッ」

すつかり監督気取りで、ポジションチェンジを命じてくる。亜弥が睾丸から顔を離すと同時に、涼香も太幹を吐きだした。

「うはっ……ハア……ハア……」

「藪嶋……あなた、いつまでこんなことさせるつもり？」

荒い息を吐きだす亜弥の隣で、涼香が不機嫌さを隠そうともせず問いかける。屈辱の口唇奉仕の直後だというのに、一步も引こうとしないのはさすがだった。

「決まってるじゃありませんか。俺が気持ちよく射精するまでですよ」

藪嶋は左右の手でそれぞれ亜弥と涼香の髪の毛を掴み、自分の股間に無理やり引き寄せた。

「さあ、牝犬ども。ご主人様に奉仕するんですよ」

「おおおっ……ううっ、太い……うむむっ」

「やつ……しわくちゃで気持ち悪いわ」

亜弥は強引に唇を割り開かれ、巨大な肉亀をねじこまれる。涼香は股の下に顔を押しこまれ、皺袋に無理やり奉仕をさせられた。

（や……お口で咥えるなんて……）

顔を背けようにも髪の毛が抜けそうに逃げられない。欲望に駆られた男はあまりにも身勝手で、好き放題に腰を振りはじめた。

「うぐっ……むぐっ……うごおっ」

喉奥を突かれて嘔吐感がこみあげる。強く閉じた目尻から涙が溢れ、頬を伝って流れ落ちた。太幹で擦られた口腔粘膜は熱を持ち、まるでのぼせたように頭の芯が痺れてくる。呼吸も苦しくなり、今にも気を失ってしまいそうだ。

「おおっ、チンポが蕩けそうだ。おおおっ」

藪嶋の呻き声が激しくなり、ピストンスピードがアップする。皺袋をしゃぶらされている涼香も、苦しげな声を漏らしていた。しかし、射精させなければ地獄が終わらないことを理解しており、奉仕を中断することはなかった。

「くうっ、藪嶋……こんなこと……あむううっ」

「二人ともしつかりフェラしてください。も、もうすぐですよっ」

切羽つまった様子で腰を振り、ただでさえ巨大な亀頭をさらに膨張させる。亜弥の喉は完全に塞がれて、まったく呼吸ができなくなった。

（苦しい……だ、ダメ……死んじゃう）

酸素不足で意識が薄れる。もう気を失うと思ったそのとき、いきなり剛根が引き抜かれた。

「うはぁっ……」

「むはっ、な、なに？」

涼香も玉袋を吐きだし、困惑した声を漏らす。と、次の瞬間、唾液で濡れそぼった剛根が、意志を持った生命体のように激しく脈打った。

「おうっ、おううっ！ 出しますよおっ、おほおおおッ！」

野太い声とともに、大量の白濁液が勢いよく噴きだした。まるで白いシャワーのように降り注ぎ、瞬く間に亜弥と涼香の顔を埋めつくす。鼻先に頬に、そして唇に、粘着質な体液がベチャベチャと付着した。

「ひっ……ひっ……ひいっ！」

「ひいっ、やめなさいっ、いやぁぁっ！」

二人の女子校生の悲鳴が交錯する。用務員は下卑た笑いを振りまきながら、まるで



放尿のように射精をつづけていた。

「顔面シャワーですよおっ、ほれほれっ、まだ出ますよおっ！」

藪嶋は雄叫びをあげて、満足するまで欲望を解き放った。

長い射精が終わり、ようやく本物のシャワーを浴びることを許された。藪嶋も一緒だったが文句は言えない。ひとつのシャワーから降り注ぐ湯で、亜弥と涼香は顔面に付着した白濁液を懸命に洗い流した。

「塗料も綺麗に落とさないといけませんねえ」

藪嶋はわざとらしくつぶやくとシャワーをとめる。そして、あらかじめ用意しておいたオイルクレンジングを、二人の身体にドバドバとかけはじめた。

「やだ、ちよつとなにするのよっ」

「普通のボディソープよりも、これのほうが落ちるんですよ」

「やめなさいっ、触らないでっ」

涼香が敵意を剥きだしにして背中を向ける。すると藪嶋はからかうように背後から抱きついた。

「おほっ、ヌルヌルして気持ちいいですねえ。ローションみたいですょ」

オイルクレンジングのヌメリを楽しむように、涼香の裸体を撫でまわす。程よい大

きさの乳房を揉みくちやにして、平らな腹部から恥丘にかけてにも手を這わせた。青い塗料が溶けだし、裸体をなおのこと淫靡に演出する。

「あうっ、やっ、いい加減にしなさいっ」

「なんか興奮してきましたよ。お嬢さま、また興奮してきましたよお」

藪嶋の陰茎がいつの間にか硬さを取り戻していた。先ほど放出したばかりだというのに、天を衝く勢いで怒張しているのだ。

「ひっ、ちよつと……あ、当たってるじゃないっ」

勃起でヒップを小突かれた涼香が、横顔をひきつらせて身を振らせる。そんな嫌がる仕草がますます藪嶋の興奮を煽りたてて、ついに背後から腰をがっしりと押さえつけられてしまう。

「お嬢さま、いいですよね？ 先っぽだけですから」

「ば、馬鹿なこと言わないで——ひッ、あひいいッ！」

抗う間もなく立ちバックの体位で貫かれ、涼香の唇から悲鳴が迸る。あの長大な剛根で串刺しにされてしまったのだ。

「またハマりましたね。やっぱりお嬢さんのオマ○コは最高ですよお」

「いやっ、ひいっ、もういやよっ……くああっ、しないですえっ」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

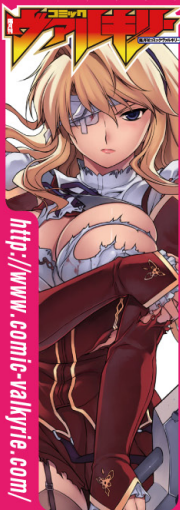
©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルバックナンバーも買えるよ!
- ジャンル別で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部のお愉快なBlogも更新中!



<http://www.comic-alkyrie.com/>



<http://www.cran-berry.com/>



<http://www.mille-feuille.jp/>



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!